論　文

19世紀—20世紀転換期における*Jugendschriften-Warte*紙の課題とその教育学的意義

吉本篤子

1. はじめに

本稿では19世紀—20世紀転換期に創刊された児童書の書評紙『児童書の守護者*Jugendschriften-Warte*(1)（以下「*JSW*」と略記）』の創刊時（1893年）から1910年頃に特徴的に見られた議論をとりあげる。

19—20世紀の転換期のドイツでは，文化批判の影響を受け，芸術教育においても様々な改革運動が生じた。それらは「芸術教育運動」と呼ばれ，カリキュラムや学校制度等，他の教育改革へと発展した。これら一連の運動は近代国家成立以後に確立した教育方法や学校制度についての見直しの動きでもあり，ドイツだけでなく，他の欧米諸国や日本においても展開された。初期の芸術教育運動から他の教育分野にまで拡大したこれらの改革は「改革教育学」あるいは「新教育」と総称されており，「子どもから」をスローガンとする，児童中心的傾向をもっていた(2)。児童の読書に関する改革の動きは，「児童書運動」と呼ばれた。子どもの読書を芸術活動と理解するこの運動は，多くの教員に支持され，同時に，幾度も論争を呼んだ。

*JSW*は，ドイツ教員組合内に組織されたドイツ児童書検定委員会連合（Vereinigte Deutsche Prüfungsausschüsse für Jugendschriften〔以下「児童書委員会連合」と略記〕）の機関紙として，ドイツ教員組合の機関紙『教育新聞（*Pädagogische Zeitung*）』をはじめ多くの教育系新聞・雑誌に同封される形で販売され(3)，児童書運動のなかで最も重要な批評や議論の場となった。児童書委員会連合は*JSW*の出版のほか，良書を子どもに読ませるため書籍市場にも働きかけ，推薦する文学作品を「源泉（Quellen）」シリーズとして安く販売した。

*JSW*の活動を理論的に支えたのが二代目編集長ハインリヒ・ヴォルガスト

（1）　日本語の「児童文学」に該当するドイツ語には，Kinder- und Jugendliteratur がある。児童文学をめぐる議論において一般には Kinderschriften は用いられず，Kinderliteratur，Jugendliteratur，あるいは Jugendschriften が用いられていた。*JSW*の推薦書リストは17歳頃までの子どもを対象としているものの，ヴォルガストら民衆学校教員たちは，主として児童期の子どもを教育しているため，日本語でのなじみのよさも考慮し本稿では「児童書」と訳すことにする。

（2）　ヘルマン・ノール（平野正久ほか訳）『ドイツの新教育運動』（明治図書出版，1987年），118-123頁。

（3）　Taiji Azegami, *Jugendschriften- Warte*, Peter Lang, 1996, S. 8.（以下*J-W*と略記）

(Heinrich Wolgast, 1860-1920) である。ハンブルクの民衆学校（Volksschule）教員であったヴォルガストの読書教育論は，同時代はもちろんのこと，死後のワイマール期，さらには戦後に至るまで文学教育に多大な影響を与えたと言われている。彼が著書で推薦した本や，*JSW* で作成した推薦書リストは，ドイツにおける児童書のカノン形成に大いに寄与した(4)。

児童書運動においてとりわけ主導的な立場をとったのがハンブルクの民衆学校教員である。ハンブルクでは，1870 年の初等教育の改革的法律制定によって，近代的な民衆学校が設立されたことに加え，新たにつくられた教員養成制度によって育った若手の意欲ある教員が，教育の近代化を進めたことから，充実した芸術教育改革の土台ができていた(5)。これらを背景に，ハンブルクの児童書運動は改革的資質を発揮し，特に「ハンブルク運動」と呼ばれている(6)。

以下，本論の叙述の筋を示しておこう。まず当時の書籍市場と民衆学校教員の問題関心を背景に児童書批評が必要とされ，*JSW* が創刊された事情を叙述する。次に，1896 年以後，既に読書教育理論の論客だったヴォルガストが *JSW* の編集長になり，主導的立場に立つとともに，児童書批評をめぐる論点が先鋭化していく過程を，推薦書リストや批評の変化に即して見ていく。さらに，その過程で鮮明になる，「傾向文学（Tendenzliteratur）」をめぐるヴォルガストらハンブルク教師陣とバイエルンを中心とする反対派の論争とその帰趨を取り上げ，この問題をめぐる理論的対立が，児童書批評の原則を確立しようとするヴォルガストらの近代的な志向性とそれに抵抗する前近代的勢力との対立であることを解明し，最後に彼らの議論の教育学的意義について触れる。なお背後にある教員間の政治的，宗教的対立についても若干言及したい。

まずヴォルガストの経歴と読書教育論を簡単に説明しておく。ヴォルガストはハンブルク民衆学校教員組合の幹部を務めるなど教員組合で活躍した。彼は，教育制度改革のための教員会議のメンバーとしても知られている。1890 年代以後は文学教育の領域でも活動し，なかでも主著『わが国の児童文学の惨状』（1896 年，以下『惨状』と略記）は政治家や文学者など，教育以外の方面からも注目された。

（4） Malte Dahrendorf, *Kinder- und Jugendliteratur im bürgerlichen Zeitalter*, Scriptor Verlag, 1980, S. 41-45; Theodor Brüggemann, „Grundideen der Literaturpädagogik von 1900 bis heute“, Harro Müller-Michaels (Hrsg.), *Literarische Bildung und Erziehung*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1976, S. 73-74; Bettina Kümmerling-Meibauer, *Kinderliteratur, Kanonbildung und literarische Wertung*, Verlag J. B. Metzler, 2003, S. 61-69.

（5） 鈴木幹雄『ドイツにおける芸術教育学成立過程の研究』（風間書房，2001 年），28-35, 38-40 頁。

（6） Gisela Wilkending, „Die Kommerzialisierung der Jugendliteratur und die Jugendschriftenbewegung um 1900“, Kaspar Maase/ Wolfgang Kaschuba (Hrsg.), *Schund und Schönheit*, Böhlau Verlag, 2001, S. 250.

芸術教育運動では，子どもの「美的享受能力」の育成が重要な教育的課題とされた。ヴォルガストも，美的享受能力の育成を通して子どもに認識能力や現実感覚が身につくと考え，民衆学校に通う児童にもそうした能力を身につけさせることが重要だと主張した。高等教育を受けない民衆層の子どもも，「芸術作品としての文学作品」，つまり良書を読むことによって美的享受能力の育成は可能であると考えたヴォルガストは，その目的を達成するために，子どもが「何を，どのように読むべきか」という理論を構築した。

ヴォルガストは，ドイツ・ヨーロッパのメルヒェンや説話，またはドイツを中心とした近代的な詩や物語文学を積極的に推薦した。彼は，これらの本こそ「真の文学作品」，つまり「良書」であり，子どもの発達にあわせて読ませることによって，児童の美的享受能力の育成が可能になると考えていたのである。

反対に，「素材」に頼る作品，具体的には当時の「低俗（俗悪）文学（Schundliteratur）」や，道徳的，宗教的，愛国主義的な「傾向」をもつ作品は，享受能力育成を阻害する，子どもに好ましくない「偽の文学」，つまり悪書であるとされた。彼が批判した娯楽文学には，当時大人にも好まれた冒険小説作家カール・マイ（Karl May, 1842-1912）のインディアン物語(7)や，エミー・フォン・ローデン（Emmy von Rhoden, 1829-1885）らによる「少女文学」・「小娘文学」(8)などがある。少年向けの冒険物語や民衆向けの娯楽文学は小冊子の形で販売されたものも多く，それらの書籍は「行商人小説（Kolportage）」とも呼ばれ，「低俗文学」の代表とされた(9)。また，「低俗文学」とともに「偽の文学」とされたのが，後に検討するクリストフ・フォン・シュミート（Christoph von Schmid, 1768-1854）やグスタフ・ニーリッツ（Gustav Nieritz, 1795-1876）らの教訓的な「傾向」をもつ文学

（7） アメリカ大陸を舞台にした先住民や移住者による冒険物語は「インディアン物語」と呼ばれ，19世紀後半に最も通俗化した形をとりドイツで大人気となったのがカール・マイの作品であった。ベッティーナ・ヒューリマン（野村泫訳）『ヨーロッパの子どもの本』上（ちくま学芸文庫，2003年），206-207頁。

（8）「小娘文学（Backfischliteratur）」は，18世紀以後成立した「少女文学」が19世紀以後変形した文学である。14歳頃の少女が，軽率で子どもっぽい振る舞いをしたのち改悛し，あるいは誘惑をはねのけて成長し，幸せな結婚をするという筋が多い。小娘文学もまたヴォルガストによって批判された。ダグマル・グレンツ（中村元保・渡辺洋子訳）『少女文学』（同学社，2004年）。

(9) 行商人小説は，当時，民衆層によく読まれた廉価版大衆小説である。19世紀末には，初等教育の普及や印刷技術の進歩により廉価本が大量に販売され，行商人小説が大流行する。当時の全新刊書の平均発行部数が一般に1000部程度だったのに対して，行商人小説は平均すると10万部であった。戸叶勝也『ドイツ出版の社会史』（三修社，1992年），180-182頁。およびロルフ・エンゲルジング（中川勇治訳）『文盲と読書の社会史』（思索社，1985年），213頁。ヴォルガストは1900年の講演において行商人小説を「民衆の情感を荒廃させる」と批判している。Heinrich Wolgast, *Vom Kinderbuch*, Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1906, S. 20.（以下*VK*と略記）

だった。

ヴォルガストが文学作品の選定のために『惨状』で示した「文学的形式の児童書は，芸術作品でなければならない」(10) というテーゼは，児童書運動のスローガンとなり，しばしば*JSW*や読書教育をめぐる議論で引用された。

ヴォルガストの読書教育理論は児童書委員会連合や*JSW*の活動に大きな影響を与えたが，彼の立場は児童書運動内部で必ずしも代表的ではなかった(11)。当時の民衆学校教員のなかには，ヴォルガストが推薦したメルヒェンや説話，あるいは古典的な良質の文学作品などを読ませることに賛成しても，現実的には困難だと感じる者や，当時の民衆に好まれた宗教的・教訓的物語を排除しようとしたヴォルガストの考えに賛同できない教員もいた。これらの問題をめぐる*JSW*内部の対立と論争については後段で取り上げる。次に，先行研究を概観し，本稿の視点について述べたい。

従来，先行研究においてヴォルガストの読書教育論の最も重要な成果は，道徳的，宗教的な成長のほかに「芸術的享受能力の育成」という新しい読書教育の目標を掲げたことである，とされてきた(12)。

ブリュッゲマンによれば，ヴォルガストの読書教育論が批判されていた1950年代の後半でも，学校の文学の授業で読まれていたのはシュトルム，シラー，ケラー，シュティフターといった，ヴォルガストが推薦した文学者の作品だった。これらの先行研究が示すように，彼の読書教育の理念や推薦書リストは，理論的な批判を受けても，長年いわゆる「良書」として，教育の場に強く実際的影響を残していた(13)。

本稿の主題である，*JSW*における批評原則の確立をめぐる内部対立について詳細に論じた研究はそれほど多くない。畔上泰治の研究は，*JSW*を主題としてとりあげ，創刊時から詳細に編集部や児童書委員会連合の課題や動向を検討しており，児童書運動の研究にあたってまず参照すべき労作である。畔上は，読書教育の問題を思想史的に解明する本稿の視点とは問題関心が異なるが，ヴォルガスト編集長時代までの「傾向」の定義を中心とした編集部の論点については，政治的文脈と内部の調整によって解決されてきたと理解している(14)。

戦後もっとも本格的にヴォルガストの理論や活動を研究したギゼラ・ヴィルケ

---

(10) Heinrich Wolgast, *Das Elend unserer Jugendliteratur*, Selbstverlag, 1896, S. 21.（以下*EJ*と略記）

(11) Wilkending, „Die Kommerzialisierung“, S. 219.

(12) Wilhelm Fronemann, *Das Erbe Wolgasts*, Verlag von Julius Beltz, 1927, S. 1-2.

(13) ヴォルガストの規準が長期に影響を与えたため，後年には時代に合わない本も「良書」として推薦されていたとも批判された。Brüggemann, „Grundideen“, S. 79-80.

(14) Azegami, *J-W*, S. 112-122 .

ンディングは，文学教育学のなかでも特にヴォルガストらハンブルクの教員による「ハンブルク運動」を中心に検討している。彼女によれば*JSW*は，「傾向」をめぐって編集部内部の意見を統一できなかったが，後述するように，外部の政治的対立者との論争(15)に直面し，児童書委員会連合での合意をはかってきた(16)。また彼女は，ヴォルガストやハンブルクの児童書委員会が*JSW*内部の統一を重視し対立者と妥協したため，その読書教育理論を後退させることになった，ととらえている(17)。

本稿では，畔上やヴィルケンディングの見解を基本的に受け入れた上で，*JSW*の内部対立と，そこから露呈する理論的「混乱」を，畔上はもとより，教育学者のヴィルケンディングとも異なり，児童書批評の原則の確立という観点から詳細に検討し，ヴォルガストらの批評活動を位置づけ，あわせて教育学的に若干の考察をしたい。

本稿における教育学的視点について補足しておこう。新たなメディアが現れるとき，それに対して子どものための教育学的な配慮が常に求められる。その際，根拠となるのは〈子どもの保護〉である。今井康雄は，世紀転換期に新たなメディアとして登場した「映画」の経験の教育学的意味を検討し，当時のドイツにおける「映画改良運動」について次のように述べている。

> 「子どもの世界」を守ろうとする映画改良論者の一連の主張は，子どもの世界と大人の世界の分離を前提とし，両者の接触を教育的な意図の統制下に置くことを要請する近代的な教育意識なしには成り立ちえないものであろう(18)。

本稿で検討する「本」というメディア自体は，当時，新しかったわけではない。しかし，出版物の飛躍的増大の影響で子どもが読書素材を選択することが可能になり，また全ての子どもが初等教育を受けるようになった世紀転換期はまさに，子どもの読書が民衆層に至るまで新たな教育的課題になった時期であった。

「〔子どもの世界〕を守ろうとする」（今井）こと，すなわち〈子どもの保護〉という視点は，近代以後，大人から子どもへの教育的配慮として受け入れられてきた。本稿では，こうした近代的な教育意識が，*JSW*での批評の議論に影響を与え，同時に＜子どもの保護＞の観点が，批評の教育学的な独自性を示すことに

(15) ヴォルガストの政治的，宗教的，愛国主義的「傾向」排除という主張は，主として保守的な陣営から，それらの価値に敵対的だとして批判された。

(16) Gisela Wilkending, *Volksbildung und Pädagogik „vom Kinde aus"*, Beltz, 1980, S. 221-229.

(17) Gisela Wilkending, „Heinrich Joachim Wolgast", *Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur*, Bd. 3, Klaus Doderer (Hrsg.), Beltz, 1979, S. 825-827.

(18) 今井康雄「20世紀初頭ドイツにおける映画と教育(1)」『東京学芸大学紀要　1部門』第40号（1989年），205頁。

なることについては，後段で言及したい。

筆者は世紀転換期ドイツにおける読書教育論と児童書運動を対象に研究しており，これまでの論文はいずれも児童書運動の中心的人物だったヴォルガストの研究を主としているが，研究の視点はそれぞれ異なっており，それに応じて主題も違っている。第一論文(19)では子どもの「私的な読書」を抑制するべきとするヴォルガストの主張と教育的配慮の関係を取り上げたのに対し，第二論文(20)では「傾向」を批判するヴォルガストの主張と道徳教育の関係を分析した。前者は子どもが好きなときに好きな本を読むのを「抑制」することがなぜ「読書教育」に求められたのかという問題でもあり，後者は文学素材の道徳的「傾向」を批判する考え方から道徳教育は可能なのかという問題でもあった。筆者はこれらの問題をヴォルガストと彼の対立者の意見に即して検討し，ヴォルガストにおいてどのような論理で「私的読書」が「抑制」されねばならなかったのかを子どもの「発達」と「保護」の観点から，そしてまた道徳的「傾向」の排除と「道徳教育」の両立可能性を，シラーに由来するヴォルガストの美的教育論の観点から解明した。ヴォルガストの対立者は主として子どもの読書が制限されることを恐れた出版業者や，愛国主義的道徳や教会的信仰心が危機にさらされるのを恐れた，ハンブルクの「愛国協会」などの市民団体や，宗教的組織の人々であった。

ヴォルガストらによる児童書運動の意義を考察するうえで，彼らがどのような社会的勢力と対立していたのかという視点からみていくのが一つの方法として有効である。そこで，第二論文同様，本稿でもヴォルガストを中心とする対立的な関係を検討するが，全国的な児童書運動の機関紙*JSW*を主たる資料として，そこで問題とされた児童書批評の原則をめぐる教員内部の対立を取り上げながら，ヴォルガストがめざした批評原則確立の試みの意義を探りたい。第二論文と同じく「傾向」を重要な論点にしながらも，ここでは児童書批評を成り立たせるために「傾向」に浸食されない自律的な美的＝文学的領域を認めるか否かを，当時，子どもによく読まれていた文学作品に即して具体的に検討する。さらに*JSW*の内部対立は，ヴォルガストらハンブルク教員らに対するバイエルンを中心とするカトリック的保守派の批判から生まれたため，ヴォルガストらの近代的批評観と反対派の前近代的批評観の対抗関係は宗教的・政治的対立も背景にもち，また近代的文化を民衆が担いうるか否をめぐる文化意識の対立であることも論述の過程

(19)　吉本篤子「ハインリヒ・ヴォルガストの児童文学批判――世紀転換期ドイツにおける読書教育をめぐって」東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室『研究室紀要』第37号（2011年），67-79頁。

(20)　吉本篤子「道徳教育に対する読書の意義：19世紀・20世紀転換期のドイツにおける「傾向論争」に着目して」東京大学大学院教育学研究科『東京大学大学院教育学研究科紀要』第51号（2012年），53-61頁。

で見えてくることになる。

2. 世紀転換期の児童書の状況と*JSW*創刊

ここでは，当時の児童書をめぐる状況と*JSW*創刊までの経緯と，創刊当時の編集部の課題を確認する。

(1) 児童書出版数の増大と*JSW*創刊

19世紀と20世紀の転換期に，児童書市場は著しい拡大をみせ，子どもたちは消費者として注目され始めた。児童書に特化した出版社もでき，子ども向けの本が量産され，豪華な装丁本も出版されるようになった(21)。その結果，氾濫する児童書からいかに良書を選び出し，子どもに与えるかが，親や教育者の切実な関心事になっていった。学校では，書籍の選定が不十分なために図書室にも劣悪本が混じっていることも指摘され，一部の教員が児童書のための批評原理が存在していないことを問題視した。ヴォルガストによれば，ドイツの出版書籍全体のうち文学書は1888年に17,016冊だったのが1889年には17,986冊に増え，そのうち児童書の数は494から591に，つまりほぼ20%も増大している。しかし，それらの大多数は「劣悪な本」だった(22)。

こうした認識にもとづき，各地の教員組合に児童書を検討する委員会が設けられ，その選択規準を明確化するための運動がおこった。1893年にはライプツィヒでのドイツ教員大会で，11の地域の児童書委員会を統合し，全国的な児童書委員会連合が結成され，その機関紙として*JSW*が創刊された。

*JSW*は，当初『教育新聞』に同封される形で配布された。初版は8375部，翌年以後増刷し，一時は56,000部にまで到達した(23)。発行部数の増加と共に*JSW*の影響力は増大し，教員たちも*JSW*でとりあげた児童書を学校で子どもたちに推薦した。

(2) ツィーグラー編集長期の紙面

創刊当初の編集部の方針と課題をめぐって，創刊号を中心に検討しよう。

創刊号（1893年8月）は，編集部による巻頭論文「我々の望むこと」のほか，初代編集長パウル・ツィーグラーの「図書室のための児童書の選定と『低俗文学』瞥見」，無記名の「児童書の出版者のみなさんへ」，そしてヴォルガストの

(21) Wilkending, „Kommerzialisierung“, S.218-251.

(22) Heinrich Wolgast, „Was und wie sollen unsere Kinder lesen?“, *Hamburger Fremdenblatt*, 62.Jg, Nr. 50 (28. 2. 90.), 1890.

(23) *JSW*の発行部数は以下の通りである。1893: 8,375, 1894: 22,500, 1898: 25,000, 1901: 31,000, 1910-1912: 56,000. Azegami, *J-W*, S. 9. 後に*JSW*は『教育新聞』以外の教育関係の新聞にも添付された。クリスマス前に配布される推薦書リスト（次頁以降を参照）は1904年には141,000部配布されていた。Heinrich Wolgast, „Ueber den gegenwärtigen Stand der Jugendschriftenbewegung“, *Blätter für Volksbibliotheken und Lesehallen*, 6. Jg. 1905, S.41.

「裕福な読者しか買わない本」から成る。この創刊号には，*JSW* の当初の方針が明確に示されている。

巻頭論文「我々の望むこと」の冒頭では，児童書の市場拡大にふれたのち，良書と悪書を区別するため，「児童書を検証し選別する必要」が教員組合で共有されたことと，児童書委員会連合の成立と *JSW* 創刊までの経緯が説明されている。

さらに，「守護者」となる教員や，この趣旨に賛同する人々が，新刊書を「親愛なる友」として歓迎するか，あるいは「危険な敵」とみなして「撲滅」するかを判断できるように，*JSW* は「一年以内に新たに出版された児童書全体」を読者に知らせ，「問題点」を解明する「批判的機関紙」となることによって，最終的には，出版者や著者，書籍販売業者や教員にはたらきかけ，「いわゆる〔低俗文学〕を書籍市場から追放」しよう，と編集部が宣言する。「守護者」という紙名が象徴し，また巻頭論文で明示しているように，子どもを「低俗文学」の著者や出版者から守るという，〈子どもの保護〉の観点が創刊号には明確に表明されている。

この巻頭論文で示される *JSW* の基本方針の論点をまとめると，(a)推薦書のリスト化　(b)「低俗」と「傾向」の批判，(c)文学作品における「芸術性」の問題，の三つである。

(a)　推薦書のリスト化

JSW は，「批評的機関紙」として児童書批評を行うと同時に，読者に分かりやすく示すために推薦書をリスト化した。新刊書を検定し，「批評」，「児童書委員会連合の批評」といった欄に掲載した。たとえば，1893 年 10 月号の「批評」欄では，3 頁にわたり 12 冊の児童書の批評を掲載しており，その中でテークラ・フォン・グンペルト（Thekla von Gumpert, 1810-1897）(24) の『自筆原稿と回想』と『アドベントの木』の 2 作を検討している(25)。

また，通常号の批評とは別に，年末近くには毎年「クリスマスに推薦する価値のある児童読み物の一覧」も作成された。創刊年 1893 年の 11 月号では「1893 年クリスマスに！少なくとも 3 つ以上の委員会で検討され薦められた児童書リスト」に 70 冊ほどの児童書を掲載した。このリストには，著者名，題名，値段や出版社のほか，当該書を推薦した地域の児童書委員会および拒否した委員会の数，適当な子どもの性別や年齢なども記載されており，12 月号では約 100 冊を追加

(24)　教育者だったテークラ・フォン・グンペルトは，少女向け文学の作家としても活動した。ヴォルガストは彼女を典型的な傾向文学作家として批判している。Wolgast, *EJ*, S. 164-170.

(25)　ここでツィーグラーは，グンペルトの本を児童に薦められない「傾向書」である，と評している。Fromm/ Prahn, „Beurteilungen. Gumpert, Thekla v.: Autographen und Erinnerungen.“, *JSW*, 1893, Nr. 3, S. 10; Berdrow/ Wolf/ Ziegler, „Beurteilungen. Gumpert, Thekla v.: Der Adventsbaum, eine Erzählung für jung und alt.“, *JSW*, 1893, Nr. 3, S. 10.

した(26)。

これらのリストには，「小娘文学」の作者，ローデンの『片意地娘（*Der Trotzkopf*）』(27) や，教訓的で宗教的な物語を著し司祭でもある児童文学作家シュミートの『タンネンブルクのローザ（*Rosa von Tannenburg*）』(28) や，愛国主義的歴史物語を書いたニーリッツの『山と町から（*Aus den Bergen und der Stadt*）』と『善の勝利（*Der Sieg des Guten*）』の2冊が掲載されている(29)。ヴォルガストが批判したこれらの作家の作品が，当時，編集部により推薦されていた点は，注目に値する。

94年以後，クリスマスのリストは「クリスマスに推薦する価値のある児童読み物の一覧」の題で，①8歳頃までの子どもと，保護者である両親，②8-10歳頃まで，③10-12歳頃まで，④12-14歳頃まで，⑤成長した青少年（14-17歳），⑥一人前になった青少年と両親，と年齢別に推薦書が一覧化され，少年向けか少女向けか，また，どの地域の委員会が推薦したのかも記された。

年齢を細分化しただけでなく，推薦書の分量も増加した。前年にそれぞれ1冊だったローデンは4冊に，シュミートも大幅に増えている。また，ヨハンナ・シュピーリの作品は，『ハイディ』ほか計12冊が掲載されている。バイエルンの将校で作家のカール・タネラ（Karl Tanera, 1849-1904）の作品は1作，ローゼッガー（Peter Rosegger, 1843-1918）の作品4作などが追加された。なお，シュミートの『タンネンブルクのローザ』は，「批評」欄（1895年7月）でも推薦書に認定されている。

(b) 「低俗」と「傾向」の批判

児童書批評の規準に合わないとして*JSW*が批判したのが，いわゆる「娯楽文学」分野の「低俗文学」と，いわゆる道徳的，宗教的，あるいは政治的「傾向」をもつ文学作品である。

娯楽文学のなかでも，「ごみと低俗（Schmutz und Schund）」と呼ばれた文学作品，つまり，「文学的価値のない本」が批判された。この「ごみと低俗」批判

(26) ニーリッツの作品は，『山や町から』を5つの委員会で推薦，1つの委員会で拒否し，『善の勝利』を5つの委員会で推薦，2つの委員会で拒否している。„Zu Weihnachten 1893!“, *JSW*, 1893, Nr. 5, S. 20/ Nr. 6, S. 23-24.

(27) 『片意地娘』は，ローデンの代表作。活発で傲慢な主人公の少女が，成長と改悛を経て理想の結婚相手を見つける物語である。

(28) 『タンネンブルクのローザ』は，騎士物語を主題とした物語である。敬虔な孝行娘のローザは，早くに母をなくし，敵に捕らわれた父とも引き裂かれるが，父親を救い出して苦労が報われる。ヴォルガストは，本書の登場人物の対話が全て宗教的，道徳的な教訓に結びつけられていると批判している。Wolgast, *EJ*, S. 96-97.

(29) „Zu Weihnachten 1893!“, Nr. 5, S. 20/ Nr. 6, S. 23-24.

は，児童書運動以前の19世紀中頃には通俗文学に対する批判として展開され(30)，*JSW* 創刊以前にも既に，子ども向けの貸本の低俗性も民衆学校教員らによって問題視されていた(31)。*JSW* 創刊以後，この「低俗文学」問題は繰り返し論点となり，のちに教育者をこえて広がる論争となった。また，*JSW* やヴォルガストらの主張によって，〈子どもの保護〉の観点から「低俗」「ごみ」を遠ざけねばならないという配慮は，一層浸透していった(32)。創刊号で「低俗文学を書籍市場から追放する」と書かれていることからも明らかなように，*JSW* は「低俗文学」から子どもを保護しようとしただけでなく，書籍市場にも介入する意図をもっていた。それは，批評活動や「源泉」シリーズ出版として具体化した。

「傾向」については，ヴォルガスト以前にも一部で批判的に論じられてはいたが(33)，ヴォルガストが『惨状』や *JSW* で「傾向」を強く批判すると，各方面から反論され，ヴォルガスト編集長の時期に一段と大きな論争や議論が行われた。

(c) 文学における「芸術性」の問題

創刊号に掲載されたヴォルガストの論考(34)「裕福な読者しか買わない本」では，芸術性の欠如した文学作品への批判が論じられている。このなかでヴォルガストは，当時の流行作家ヴェリスヘッファー（S. Wörishöffer）の『見習い水夫ロベルトの航海と冒険』を「高価で良い装丁にもかかわらず，もっとも低級な種類の低俗文学である」と批判した(35)。豪華で美しい装丁であれば「もの」としての本の芸術性は保たれるかもしれないが，教育的手段としての「本」は，本そのものの芸術性だけでなく内容の芸術性もなければならない，と考えるヴォルガストは，児童書による芸術的享受を教育するために，挿絵や装丁の芸術性のみならず，ことばの芸術性も重要であると指摘している(36)。ここでの「芸術性」とは，文学作

(30) Wilkending, „Kommerzialisierung“, S. 226.

(31) C.W. Dabbe, „Jugend- und Volksschriften“, *Pädagogischer Jahresbericht*, 1868, S. 234-253; Ludwig Göhling, „Indianergeschichten“, *Pädagogische Warte*, 1891, S. 2-4.

(32) 娯楽文学，「低俗」文学批判は世紀転換期以後広範に行われ，1926年には，低俗であると指定された本の書店での取り扱いや子どもへの販売を規制する「ごみ・低俗書物に対する青少年保護法」が制定されるという形で，「低俗」からの〈保護〉が法的に実現した。

(33) Dahrendorf, *Kinder- und Jugendliteratur*, S. 41.

(34) この論考では，ヴォルガストの氏名の前に，「ハンブルク民衆学校教員組合の児童書委員会の依頼を受けて書かれた」と添えられている。創刊号の「編集部」以外の記名論文は，ヴォルガストとツィーグラーのものだけであることや，創刊年以前に既にヴォルガストが読書教育の論考を複数発表していることからも，この時点でヴォルガストの理論が注目されていたと考えてよいだろう。

(35) 当時のヴェリスヘッファーの人気については，ヒューリマン『ヨーロッパの子どもの本』上，207頁を参照。

(36) O. Gölitz, „Bericht über die Tagung der vereinigten deutschen Prüfungs-Ausschüsse für Jugendschriften in Hamburg am 25. Mai 1896“, *JSW*, 1896, Nr. 6, S. 21-23.

品の形式と内容にかかわる問題である（後段を参照）。

最後に，ツィーグラー期の*JSW*の課題についてまとめておこう。①創刊当初から，児童文学における芸術性の問題に取り組むことが明確に意識されていた。②その問題に対処するために，良書悪書の規準の確立をめざし，それに見合う本を推薦する批判的機関紙になることをめざした。③批評活動によって，市場に氾濫する悪書を排除し，良書を子どもに与えることを期待した。こうした活動は，類似の目的をもった他の媒体がなかった時期には，特に意義深いものだった。

3．ヴォルガスト編集長期と「傾向」批判の先鋭化

(1) ヴォルガスト編集長就任と当時の課題

当初，*JSW*は『教育新聞』に同封されていたが，批評を中心に掲載すべきだとする『教育新聞』と，同紙から自立してより多面的に児童書の議論を掲載したい*JSW*との見解の相違から，両者の関係は悪化した。1896年5月に児童書委員会連合の会議でこの問題が議論された結果，*JSW*の本拠地は同年7月に『教育新聞』の本拠であるベルリンからハンブルクに移され(37)，編集長もベルリンのツィーグラーからハンブルクのヴォルガストに交代した。この結果，ハンブルクの児童書委員会とヴォルガストは児童書運動において主導的立場を示すようになり(38)，ヴォルガストは編集長就任から病気を理由に辞任する1912年まで，16年もの間，編集長を務めた。

編集長就任号（1896年7月）にヴォルガストは論考「導入として」を発表し(39)，従来の活動の問題点を指摘して，彼の方針を明らかにした。ヴォルガストは*JSW*の問題点を，児童書委員会連合で「批評の原則」がまだ合意できていない点に求めた。彼が特に重要だと考えた原則は，「傾向」と文学の「芸術性」の問題に関係している。

前段でも触れたように，ヴォルガストの「傾向」とは，政治的傾向のみならず，宗教的，愛国的な傾向も指している。彼にとって本来，文学作品は純粋に「美的」な，「文学的」意図をもって書かれるべきものであり，それ以外の特定の教育目的や（愛国心や信仰心などの）特定の心情を育成しようとする目的で書かれた本は「傾向書」であった(40)。

ヴォルガストにとって，当時の児童書の多くは，子どもに教訓的な影響を与えるための「傾向書」に過ぎず，芸術的規準を満たしていなかった。地域の児童書委員会の選定の多くも，彼の批評原則に合致せず，「文学作品」としての規準を

(37) Ebenda.
(38) Wilkending, „Kommerzialisierung“, S. 220.
(39) Heinrich Wolgast, „Zur Einführung“, *JSW*, 1896, Nr. 7, S. 1.
(40) Heinrich Wolgast, „Katholische Jugendschriften-Kritik“, *JSW*, 1899, Nr. 2, S. 5.

満たしているか否かよりも，児童書の「教訓的・道徳的影響」の方を重視した，好ましくない状況にあるように思われた(41)。

ヴォルガストは編集長就任時に，*JSW* の課題について書籍市場から「娯楽書」や「傾向書」を排除し，子どもの能力にあった「民衆の魂（Volksseele）という文学の源泉から生まれた芸術作品」を選別すること，の二点を改めて強調している(42)。既にヴォルガストやツィーグラーも創刊号で同様の考えを述べており，編集長になったからといって紙面の性格が根本的に変わってしまったわけではないが，彼の読書教育論が就任以前より紙面に反映されるようになった。ヴォルガストの主張が前面に出ると，内部対立も鮮明になるが，紙面での論争の過程で児童書批評の原則は明確化し深められていく。そこで浮上してくる批評原理をめぐる基本的対立は，批評の自律を求めるヴォルガストたちの立場と，批評を政治的，宗教的顧慮に従属させる，ヴォルガスト批判者たちの立場の対立だった。

次に *JSW* 紙上の論争の経緯を，それが一応の決着を見た 1906 年の児童書委員会連合総会にいたるまで，検討したい。

(2) 「傾向」批判の先鋭化と *JSW* 内部での対立

ヴォルガストの新しい方針のもと，最も端的に変化したのは，本の選定である。1898 年には，年末に掲載されていた「クリスマスに推薦する価値のある児童書」のリストに，決定的な変化があった。この年は，あらかじめハンブルク児童書委員会が暫定的に作成した案をもとに，児童書委員会連合で編集したものが掲載された。

リストの構成は，年齢別の区分を踏襲し，新たに 10 歳 -12 歳までの子どものリストに，従来の項目のほか「物語，メルヒェン，説話」と「博物と地理」の項目を加えている。12-14 歳では「物語，メルヒェンなど」「説話，歴史物語，伝記」「博物と地理」に，それ以上の子どもには「物語，ドラマなど」「歴史，説話，歴史物語など」「博物と地理」に細分化された。それに対応し，グリムやハウフのメルヒェンや説話などが新たに掲載されている。また，ハインリヒ・ホフマン（Heinrich Hoffmann, 1809-1894）の『もじゃもじゃペーター』も 8 歳までの子どもの欄にリスト入りした。1901 年頃になると，ユーゲント・シュティールの影響を受けた芸術的挿絵画家として知られるエルンスト・クライドルフ（Ernst Kreidolf, 1863-1956）の本もリストに加えられた(43)。

ハンブルク委員会の作成したリストが基になっているため，ハンブルクの物語

(41) Wolgast, „Zur Einführung“, S. 1.

(42) Ebenda, S. 25.

(43) 1901 年のリストには『花のメルヒェン』やリヒャルト・デーメル（Richard Dehmel, 1863-1920）との共作『フィッツェブッツェ』が記載されている。クライドルフについては，野村泫『ドイツの子どもの本』（筑摩書房，2009 年），25-26 頁，58-60 頁，161-164 頁。

や説話など，地域特有の本も掲載された。前年まではほとんどなかった北ドイツの作家シュトルムの作品は，ヴォルガスト自ら解説を書いた『人形遣いポーレ』(44) をはじめ5冊以上掲載されている。驚くべきことに，前年まで多数掲載されていたシュミートやローデンの作品が，この年は1作も収録されていない。『惨状』で批判された彼らの作品が全くリストに含まれていないことからも，ハンブルク委員会の中でヴォルガストの理論が影響力をもっていたことは明らかである。翌年以後も，98年のリストがベースになっており，シュミートらの作品がリストに復活することはなく，むしろヴォルガストの考える「芸術作品」としての文学作品が掲載される傾向が強まっていった。

同様の変化は「批評」欄にも生じていた。1893年にクリスマスのリストで推薦されていた，ニーリッツの『山と町から』と『善の勝利』という2冊の短篇集の扱いに変化が起こる。1896年8月の「批評」欄では，これら2冊が10の委員会で検討され，否定的な評価が下された。

『山と町から』に収められた「ヴァイオリン職人とその子ども」では，ザクセンのプロレタリアの住宅，労働，食料など，彼らの貧しい生活がえがかれている。批評では，物語の中にチフスや大混乱が登場するが，ありそうもないことに満ち，物語の大半に筋もない，と批判され，以下のように結論づけられた。「登場人物が陳腐な型通りで，彼らのことばづかいもそれぞれ特徴づけられてもいない。わざとらしい印象を与える。悪趣味で田舎くさい。叙述方法は一貫して時代遅れである。(…) この本は拒絶されるべきである！」(45)。

4作の短篇からなる『善の勝利』では，「懲役囚」と「モルガルテンの戦い」という物語については，内容と叙述が良いとしながらも，残りの2作品「誠実さの報酬」と「遺産」について，「我々の趣味に合わない。この二つの物語は外してその代わりになにかふさわしいものを入れるべきである」と評している。「誠実さの報酬」については，一部の登場人物の誠実さを評価しながらも，作品全体は否定される。「遺産」は，若い役人と花嫁候補，財産をもつ老人をめぐる遺産がらみの物語であるが，全てが「三文小説」的であるとされた。

これらの批評において，登場人物の叙述が「自然」であるか否か，また，「趣味」の観点から作品の文学的・美的な質が検討されており，この頃に編集部の関心が質的に深化していることを感じさせる。先の批判的コメントにもかかわらず，97年までのクリスマスのリストには，ニーリッツの本が8冊掲載されていたが，98年以後には完全に消えてしまった。

このように，98年を境に，ヴォルガストが『惨状』で批判した作家の本がク

(44) Th. Storm, *Pole Poppenspäler*, Heinrich Wolgast (Hrsg.), Verlag George Westermann, 1898.
(45) „Beurteilungen", *JSW*, 1896, Nr. 8, S. 32.

リスマスの推薦書リストから外れていった。他方で彼が推薦していたシュトルムやローゼッガー，ハンブルクの女流作家エリゼー・アヴェルディーク（Elise Averdieck, 1808-1907）などの作品のほか，グリムやハウフのメルヒェンや，シラーの『ヴィルヘルム・テル』やシュティフターの『石さまざま』などの古典的な文学作品が掲載されるようになった。しかし，同時に*JSW*には一部の作家が冷遇されていることへの不満を感じさせるような論文や地域的，宗教的な異論が掲載されており，紙面の新しい傾向に不満をもつメンバーがいたものと想像できる。それはとくに「傾向」をめぐる論争となって具体化した。

念のために触れておくと，ヴォルガストの編集長就任以前にも内部対立がなかったわけではない。特に，北部のプロテスタント都市ハンブルクとバイエルンを中心とする南部カトリック地域の対立は，宗教問題も関係していただけに深刻である。たとえば1895年2月には，*JSW*編集部がプロテスタント児童文学を優遇しているのではないかというカトリックからの不満が掲載された(46)。この議論は児童文学をめぐる対立であるとはいえ，政治的対立とも無関係ではなった。というのも，そもそも，編集部の置かれたハンブルクは，カトリックよりもプロテスタントの多い地域であったが，それだけでなく，ハンブルクの民衆学校教員は特に教育改革的・政治的ラディカリストが多いことで知られており，教員組合員の中には社会民主党党員もいた(47) ため，ハンブルクの児童書委員会による「傾向」批判は，南部の保守的なカトリック系教員たちによって，社会民主主義的な思想によるカトリック批判ととらえられたからである。

1897年2月に編集部は，論文「バイエルン的・カトリック的」のなかで，*JSW*が南ドイツ，とりわけバイエルンの児童文学を無視しているだけでなく，「バイエルンの道徳や心情，文学における特徴」を軽視しているという批判に対して，カトリック系出版社の本も推薦していると弁明し，評価の規準は宗派の如何にあるのではなく，作品の「文学性」にあるのだ，と反論している。バイエルンの芸術や文学それ自体を批判しているのではなく，編集部は，作品の素材の扱い方を問題とした。素材が「文学作品」の中に，つまり「文学性」をもった作品の中に取り入れられれば，子どもの美的な感覚を覚醒させ，芸術的享受能力を育成する素材になりうる，というのである。

「傾向」をめぐる議論において特に重要なのは，シュミートの作品をめぐる評価である。論文「児童書作家としての三月前後期の正統的神学者」(48) でヴォルガ

(46) この批判に対して編集部は，「傾向書」は，その宗教や思想に関わりなく，「我々ドイツ児童文学の病んだ現象である」と反論し，改めて「傾向書」を批判している。Die Schriftleitung, „Zur Beachtung“, *JSW*, 1895, Nr. 2, S. 5.

(47) Jennifer Jenkins, *Provincial Modernity*, Cornell University Press, 2003, p. 156.

(48) Heincirh Wolgast, „Orthodoxe Theologen aus vor- und nachmärzlicher Zeit als Jugend-

ストは，シュミートを「傾向文学」作家として批判したため，ミュンヒェン児童書委員会から抗議される事態となった。特にシュミートの出身地バイエルンの教員たちの抗議は激しかった(49)。

これらの批判に対し，1899年にヴォルガストは，児童書委員会連合の見解相違について解決を求め，ミュンヒェン教員組合で講演を行い，自らの考えを鮮明にした(50)。この講演でヴォルガストは，文学批評では作品のなかの「文学性」が重視されるべきなのに，実際はそれが無視され，専ら宗教的，道徳的，あるいは政治的な価値のために利用されていると，文学作品の評価をめぐる問題点を指摘している。かつて*JSW*の推薦書リストにも掲載されたシュミートの『タンネンブルクのローザ』を，文学作品という形式を利用して道徳や信仰を説いているに過ぎない，と彼は指摘する。死を目前にした娘に語りかける母親が信仰について饒舌に語る場面は，文学的な内容の自然さや美しさを無視して，信仰について教授するためだけに書かれている。シュミートの場合，物語の「形式」が文学的「内容」に合わせて叙述されるのではなく，教授の手段として文学的形式を利用しているだけだ，とヴォルガストは批判した(51)。

最後にはヴォルガストは以下のように，講演を締めくくっている。

> 我々は，宗教的・愛国主義的傾向をもった固有の児童書に文学作品を対置させよう，児童からシュミートを取り上げ，彼らにローゼッガーを与えよう，タネラを取り上げ，リーリエンクローンを与えよう(52)。

「児童からシュミートを取り上げよう」ということばが，ミュンヒェンのシュミート支持者たちをさらにいらだたせたのは想像に難くない。しかし，ヴォルガストは，自分は宗教に敵対的なのではなく，シュミートの作品の文学性を批判しているのだ，と論じ，児童書批評の規準を伝えようとしていた。批判者たちは，ヴォルガストが自分の政治的志向と合わないためにシュミートのような作家の宗教的，愛国的傾向を批判していると考えたが，ヴォルガストは，愛国主義者や信仰心のあつい人間への教育を否定していたわけではなかった。

ここでヴォルガストは作品の「自然さ」と「わざとらしくないこと」という視

---

schriftsteller", *JSW*, 1896, Nr. 9, S. 33-34/ Nr. 10, S. 37-38.

(49) 1898年，バイエルンのカトリック教員組合の文学指南書では*JSW*を「青少年から体系的に信念と道徳を奪い取るために手をさしのべる」と非難している。Heinrich Wolgast, „Das Religiöse und Patriotische in der Jugendschrift", *VK*, S. 24.

(50) Ebenda, S. 24-51.

(51) Ebenda, S. 28-31.

(52) Ebenda, S. 51. ここでヴォルガストは道徳的心情を育成する真の芸術作品の作家としてローゼッガー，愛国的心情を育成させる作家としてリーリエンクローンを挙げ，「傾向」作家としてタネラとシュミートを挙げている。

点を提示しているが，それは『惨状』における「形式」と「内容」の観点と関係している。彼にとって，「傾向」をもつ文学作品の問題は，「不自然さ」や「わざとらしさ」にあり，子どもに道徳心や愛国心を強要する点にあった。これに対し，「真の文学作品」とは，素材に頼るのではなく，素材（内容）が「形式」へと「自然」に組み込まれ，その意味で「内容」が「形式」へと一体化するような形で叙述された作品である。それがゆがめられると，「不自然」になり「わざとらしさ」があらわれる。このような規準から，ヴォルガストは「傾向文学」を批判する際，しばしば「不自然」ということばを用いた。

ヴォルガストは本講演で戦争小説作家リーリエンクローン（Detlev von Liliencron, 1844-1909）の作品をとりあげ，愛国主義的児童書作家のように「不自然な英雄的精神」をえがくのではなく，「わざとらしさのない」，人間らしい，「祖国愛的な心情に満ちた」叙述をしている，と説明した(53)。リーリエンクローンの作品がその「傾向」にもかかわらず肯定的に言及されているのは，それが「祖国愛的心情」を「自然」に組み込んだ文学作品たりえているためであった(54)。

『惨状』出版の翌年1897年には，「地方の声」という論考が*JSW*に掲載された(55)。著者シュルツは，地方で児童書問題に関わった経験から，宗教的傾向の排除に異議を唱えた。

シュルツによれば，地方での読書とは児童が家族に読み聞かせるものであり，安定的な宗教性をもったシュミートの作品が年配者にも好まれ，求められている。しかも地方の親たちは，そもそも民衆学校上級学年以上の子ども程度の精神的理解力すらもっていないため，芸術性の高い文学作品を読ませるような高度な読書教育を彼らに期待するのは難しいのが実情なのだ，と結論づける。

この見解に対しヴォルガストは反論を寄せた。シュミートなど傾向文学作家の作品には，行商人小説同様，「センセーションの欲求」や「センチメンタルな素材」があふれていて，到底良書とは言えないし，現に子どもや民衆が読み，求めているという事実自体は，シュミート作品が彼らにとってふさわしい文学であるという理由にはならない，と述べ，民衆になじみのある素材を用いながらも「文学的に優れ」，なおかつ「民衆らしさ（Volkstümlichkeit）」を維持しているような文学作品を提供するべきだ，と主張した(56)。

「芸術的享受能力の育成」あるいは「趣味的教養の賢明な育成」は「上級の学校教育の特権ではない」という見解は，ヴォルガストの読書教育論の核心をなし

(53) Ebenda, S. 51.

(54) ヴォルガストは本講演で，リーリエンクローンの短編を朗読しながら，戦争文学であっても「傾向」文学にならないと説得しようとしている。

(55) A (lbert). Schulz, „Eine Stimme vom Lande“, *JSW*, 1897, Nr. 1, S. 1-2.

(56) Heinrich Wolgast, „Entgegnung“, *JSW*, 1897, Nr. 1, S. 2-3.

ている。シュルツやシュミートの支持者は，芸術的享受能力は上級教育を受ける人びとのためのもので民衆層には不要であり，民衆は能力も乏しいのだから身近な素材を用いた文学作品を読んでいればよい，と考えていたため，民衆層の子どもに芸術的作品としての児童書を推薦することに疑問をもっていたが，ヴォルガストはこれに異を唱えた。民衆層の子どもでも芸術的享受能力を育成することは可能であり，優れた文学作品を読み，享受能力が育成されれば，子どもたちはおのずとシュミートから離れるようになる，と彼は結論づけた。この論争から，ヴォルガストたちと批判者たちの対立は「傾向」や「通俗小説」の評価をめぐる対立を超えた広がりをもち，民衆と読書，民衆と文化といった関係の理解にまで及んでいることがわかる。

ヴォルガストが改めて「傾向」批判の正当性を主張したことによって，対立は解消するどころか激化していった。この論争が示すとおり，「傾向」の問題は作品の「文学性（芸術性）」の問題と分かちがたく結びついており，彼にとって「傾向文学」は，享受能力育成を阻害する「文学性（芸術性）」の低い文学に他ならなかった。

ヴォルガストの「低俗文学」に対する批判には共感するものの，宗教的乃至道徳的な文学には教育的意義があると考える教員も多かった。ヴォルガストやハンブルク児童書委員会による「傾向文学」批判が，信仰心や道徳心，あるいは愛国心に敵対的と判断されがちだったこともあり，ヴォルガストらの努力にもかかわらず，児童書委員会連合においても児童書の批評規準について意見を統一するのは難しかった。

1906年には，ハンブルク委員会のグレーザーとフランクフルト委員会のリース，のちにクルムバッハ＝ブライヒのディッポルトが加わり，絵本の挿絵における愛国主義と道徳の関係という「傾向」解釈をめぐる議論が行われた(57) のち，両陣営がある程度納得する形で対立を解決する必要性に迫られ(58)，同年7月に行われたミュンヒェンでの児童書委員会総会で，「傾向」やその他に関する「児童書批評のための原則」が決議され，「傾向」をめぐる論争は一段落した。

(3) 対立の「妥協的解決」？—批評原理の確立のために

1906年7月の児童書委員会総会は，28の地域の委員会とヴォルガスト，その他ミュンヒェン児童書委員会などから総勢約180名の委員が出席して開催され，

(57) *JSW*, 1906, Nr. 2, Nr. 4.; Azegami, *J-W*, S. 113-115.

(58) 1904年末，ハンブルクの児童書委員会と社会主義的な出版社 Auer und Co などと共催した展示会を他の書籍商らが批判したことから，1904年から1905年にかけて，ヴォルガストやハンブルク児童書委員会と出版社との対立が先鋭化したため，*JSW* としても，委員会連合内部で「傾向」の見解をめぐる対立を解消しておく必要があった。Wilkending, „Kommerziealisierung“, S. 250.

最終的に，ハンブルクとベルリンの委員会で提案したテーゼのなかから以下の三つのテーゼが採択された(59)。

1. 「文芸芸術（Dichtkunst）の手段によって理念を描写したい衝動という意味での傾向は，文学的創造の必要不可欠な契機である。芸術の外部にある目的のための意図的な宣伝という意味での傾向は，文学的創造の中へ芸術に疎遠な契機をもちこんでしまう（本来の傾向書）。」（ハンブルクの第一テーゼ）
2. 「芸術的構成の法則を完全に保持しながら同時に読者への宗教的，道徳的，あるいは愛国主義的影響を及ぼすような文学作品は，それがその他の点で青少年の読者の受容能力に対応している限り，児童読み物として無条件に推薦するべきである。」（ベルリンの第一テーゼ）
3. 「本来の傾向書は，子どもから遠ざけられていなければならない，なぜなら，そうした書物は芸術的享受の素朴さを破壊し，文学作品の価値判断のための間違った規範を確立するからである。」（ハンブルクの第二テーゼ）

本総会で採択された三つのテーゼの評価について確認しておこう。第一テーゼでは，「本来の傾向」と「文芸芸術の手段によって理念を描写したいという衝動という意味での傾向」の二つの傾向が対置されている。作家は常に，文学作品に対して何らかの「傾向」をもたらすが，その傾向が理念への衝動という意味にとどまり，作品が美的に構成され素材と内容が調和している限りにおいて，作品自体の芸術性は維持される。しかし「傾向」が素材の強さに向かい内容との美的調和を損ない，素材自体の傾向が教訓として読者に直接的に働きかけるようであれば，それは「本来の傾向書」であり，児童書として認めることはできない。このように，「傾向」の概念から文学・美学的評価の規準という原則を確認した第一テーゼは，*JSW* 内部に対してはハンブルク委員会の価値規準を改めて示す意味があり，*JSW* 外部に対しては児童書委員会連合の評価が客観的で非党派的であると示す意味があったと評価されている(60)。この三つのテーゼは，従来，ヴォルガストやハンブルク委員会の一種の妥協であると理解されてきた。たしかに，第二テーゼでは，「芸術的構成の法則を完全に保持している」という条件付とはいえ，素材についての傾向を容認する余地をもった表現になっており，子どもの読書に対する宗教的，道徳的，愛国主義的影響を過剰に批判しているというヴォルガストへの度重なる批判に対応し，一種の歩み寄りといえる側面を残した。しかし，本稿では児童書批評の原則の確立という視点から解釈することによって，この評価と違った理解を示したい。

(59) Herm. L. Köster/ Ludwig Opfinger, „Protokoll der Generalversammlung der vereinigten deutschen Prüfungsausschüsse für Jugendschriften in München“, *JSW*, 1906, Nr.7, S. 25-27.

(60) Azegami, *J-W*, S. 117-118.

ヴォルガストらが特定の政治的・宗教的傾向のみを排除しようとしていると誤解されたのは，そもそも，どのような文学作品も「傾向」をもつという点の議論が不十分だったためである。第二テーゼは，ヴォルガストや*JSW*が特定の傾向のみを排除するものではなく，芸術性を損なうような形で組み込まれる「傾向」を排除すべきと考えていることを改めて示したものであった。その意味で「傾向」概念を二つに区分した第一テーゼと並んで第二テーゼは「傾向」概念規準の補足であり，妥協というより批評原理の確立のための小さな前進ということも可能であろう。

本稿では第一・第二テーゼと第三テーゼの関わりに着目する。なぜなら，第三テーゼの「芸術的享受の素朴さ」という概念と第二テーゼの「読者の受容能力」という概念を合わせたことこそが，児童書批評の規準確定にとって決定的に重要だったからである。第三テーゼでは子どもの芸術的享受の〈素朴さ〉という性質を取り込んだ。それによってヴォルガストらは，「文学的にまだ腐敗していない」子どもによる〈素朴〉な経験こそが子どもの読書の原則だと強調した。そうした経験を破壊するような「傾向」を遠ざけよ，という主張と第二テーゼの「読者の受容能力」という条件を組み合わせることによってこそ，子どもが読書によって安易に「傾向」の影響を受けてしまう可能性を排除できる。つまり，これらのテーゼを総合することによって，子どもの能力に配慮しながら美的享受能力育成のため阻害要因を排除した，〈保護圏のなかでの読書〉という〈素朴な芸術的享受経験〉が保障されたのだ。二つの傾向概念を提示し，妥協ともみられるテーゼのなかで，ヴォルガストらハンブルクの教師陣によって提案された第三テーゼは，美的享受のための読書を可能にする条件を最大限に可能にしようとしていたといえる。

4. おわりに

ここまでヴォルガストを中心とする*JSW*の児童書批評の原則を求める歩みを取り上げてきたことによって，彼らの批評原則の概要は，ほぼ明らかになったものと思う。最後にこれまでの議論を簡単に総括した後に，ヴォルガストの読書教育論や*JSW*の活動の教育学的な意義について改めて考察したい。

従来，児童書は主として教訓的な効果の有無を規準として判断されていたのに対し，ヴォルガストは，従来の規準では児童書の氾濫による混乱を改善することは難しく，子どもが読書から美的享受能力や教養を得ることができないと考えたため，児童書批評の原則を確立することで自身の考える読書教育を実現しようとした。ハンブルクを中心とした民衆学校教員たちはその理念に賛同した。彼の求めたその新しい規準とは，「低俗」と「傾向」を取り除くことであり，文学作品の純粋な「芸術性」を問うことだった。社会に存在する宗教的，政治的，経済的

規準など，様々な規準から離れて，文学作品の世界の中に存在する芸術性を問う批評とは，まさに，近代的な批評の規準への試みであった。そういう意味で，児童書運動は，児童書を対象とした近代批評の方法と規準を模索する試みであり，*JSW* はそうした試みの記録として読むことができる。その規準を満たした文学作品の読書によって，一部の教養層だけでなく民衆層の子ども同じ美的享受能力や教養を共有することが必要だと，ヴォルガストを始めとする一部の児童書運動の担い手たちは感じていた。

ところが，実際に「低俗」と「傾向」を批判の規準とする批評原理を確立する試みには，困難が生じた。本稿ではとりわけ「傾向」概念の解釈をめぐって，*JSW* 内部でさえ対立が見られ，見解の統一が困難だったことを確認してきた。

「傾向」批判をめぐる，ヴォルガストらと批判者との対立は，近代的な批評観と前近代的批評観との対立，つまり，文学作品には作品そのものに固有の自律性があり，素材の傾向は作品の自律性の中に自然に組み込まれているべきものだという考えと，作品の自律性を認めず，素材の傾向こそが作品の良し悪しを決めるという考え方の対立であった(61)。言いかえれば，読書を物語世界の内容と形式に関わる美的な経験とみる理解と，本の素材のもつ刺激や傾向を読者に注入する経験とみる理解の対立でもあった。本稿は，*JSW* 紙上にあらわれた対立を児童書批評の原則をめぐる対立として理解する視点から，ヴォルガストらハンブルク教員らを中心とする近代的批評意識とバイエルンを中心とする前近代的批評意識の対立を具体的に取り上げることを課題としつつも，その対立を通して，宗教的，政治的な対立のみならず，国民文化の形成における民衆層の役割をめぐる対立も見えてくることを述べた。

〈保護されるべき存在〉としての子どもを対象とした点において，ヴォルガストや *JSW* の取り組みは，一般的な近代批評と異なっている。十分な批評能力を備え，自律した読者であれば，文学作品の純粋な芸術性のみを判断規準とすればよい。しかし，自立し既に十分な能力を備えた大人ではなく，未熟で，「傾向」や「低俗文学」のゆがんだ現実に惑わされやすい，美的享受能力が未だ育成されていない子どものための本の批評原則は，常に〈子どもの保護〉を前提に構築すべきであると，ヴォルガストは考えた。この点において，児童書批評の原則は，近代的な批評原理からすれば，不十分なところがあると見られるかもしれない。

〈子どもの保護〉の原理を最優先することによって，批評それ自体の内在的原理を追求する試みには一定の限界が生まれ，常に〈保護〉された世界という限定された領域の中での美的教育論とならざるをえなかった。保護圏内に置かれた子

(61) このようなヴォルガストの芸術観に，シラーの美的教育論からの典型的な影響をみることができる。フリードリヒ・フォン・シラー（小栗孝則訳）『人間の美的教育について』（法政大学出版局，2003年）。

どもの美的教育の経験の論理こそ，近代的な教育改革運動としての児童書批評原理確立のための試みにおける独自の論理であった。本来相容れない，完全に自律した領域での美的享受と〈保護〉圏内での経験を同時に追及するヴォルガストに対して，反対派は，美的経験のようなどうなるか分からない経験よりも，あらかじめ分かっている「素材による直接的な経験」のほうが，子どもを十全に保護できる点で確かなものだと感じていたのは間違いない。彼らにしてみればヴォルガストが言っている「芸術性」の追求という近代的論理は，あまりに民衆から遠く，曖昧なものを追求しているように思われた。だからこそ，彼の「傾向」批判は十分に理解されず，自身の政治性にもとづく主張であると考えられた。ヴォルガストが考えていた美的享受能力の育成とは，そのように難しいプランであった。

本稿で取り上げた限りにおいて，ヴォルガストが対立したのは，子どもが読書素材から直接的に受ける影響を重視するような，前近代的な読書教育観であった。他方で，ヴォルガストの理論と運動には，同時代に進行していた教育的動向・思想から後に理論的挑戦を受ける兆しがあった。ヴォルガストらの活動もその一環として位置づけられている改革教育学は，児童中心主義的な志向をもっていた。読書において子どもの自発性や活動を最大限に尊重しようという考えに立ったとき，「子どもの読みたいもの」を読ませるべきだ，という理屈が成り立つのは容易に想像できる(62)。そうした考えを，当時発展しつつあった心理学が理論的に支えることにもなった。第二次大戦以後は，大衆文化を肯定的に見る人びとからも「子どもの読みたいもの」を読ませる読書教育が支持されることになる。いわばこうした「近代以後」の理論とも対立するという点において，ヴォルガストはまさに過渡期の教育理論家であったと言えよう。しかしもう一方の側面についての解明は本稿の主題を超えている。

(62) ヴォルガスト以後，激変の時代を経て，70年代以後は再び多方面からヴォルガストに対する批判が生じた。マルクス主義的立場からすればヴォルガストの美的享受能力育成論はあまりにも「市民的」で「ブルジョア化」してみえた。また，通俗文学や大衆文化を評価しようという試みは，ヴォルガストが否定した文学作品そのものや，「子どもの欲求」を評価しようとした。Dahrendorf, *Kinder- und Jugendliteratur*, S. 47, 52.